

紀 要

第 11 号

目 次

序

- 近江における縄文社会の展開過程に関する覚え書き…………… (瀬 口 眞 司)
—地域の検討1. 湖東北部地域—
- 近江における縄文社会の展開過程に関する覚え書き…………… (小 島 孝 修)
—地域の検討2. 湖東南部地域—
- 櫛の造形 —縄文時代の竖櫛—…………… (中 川 正 人)
- 滋賀県における弥生時代の石鏃の変遷についての素描…………… (田井中 洋 介)
- 今津妙見山古墳にみる古墳の築造と葬送手順の一例…………… (横 田 洋 三)
- 古墳時代における琵琶湖およびその周辺地域…………… (細 川 修 平)
- 長浜市石田町所在の石棺について…………… (北 原 治)
- 観音寺山南麓における横穴式石室墳の一例…………… (辻川哲朗・山中 繁)
—蒲生郡安土町石寺所在谷川筋古墳群の調査—
- 蒲生郡の渡来氏族とその文化…………… (大 橋 信 彌)
- 草津市笠山古窯出土遺物の紹介 (続) …………… (畑 中 英 二)
—窯詰めの方法の復元について—
- 森瓦窯再考 —「田原道をめぐる二つの地域」補遺—…………… (重 岡 卓)
- 近江式装飾文よりみた小形板碑の年代…………… (兼 康 保 明)

1 9 9 8 . 3

財団法人滋賀県文化財保護協会

長浜市石田町所在の石棺について

北原 治

豊臣秀吉の家臣石田三成の出身地として知られる長浜市石田町は長浜平野の東を限る横山丘陵のふもとに位置する。石田一族の氏神であった八幡神社には出土地不明の組合式石棺材が存在する。この石棺は付近の橋に転用されていたものを近年、現在地へ移設されたものであり、それまでの経緯は一切伝わっていない。この石棺材がどういった古墳から出土したものかを推測してみたい。

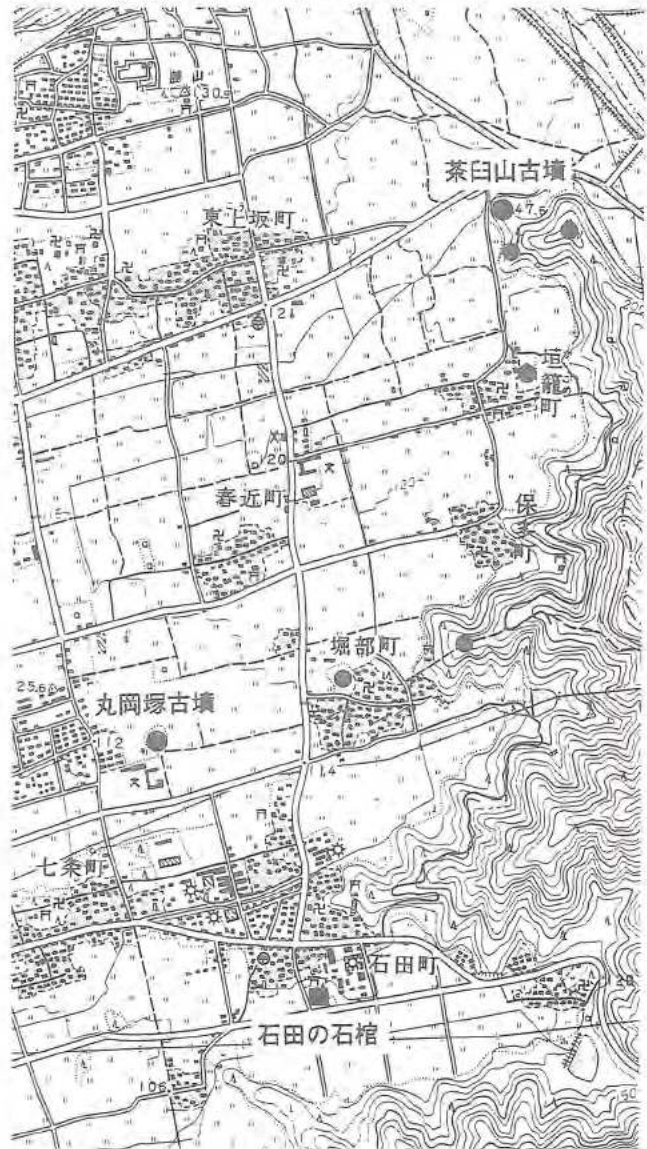
この石棺には丸山竜平氏をはじめとする2~3の研究がある。丸山氏は近江の石棺を集成し、古墳時代の近江の社会構造と石棺製作工人のあり方について述べた「近江石部の基礎的研究⁽¹⁾」において、この石棺を5世紀末ごろに造られた凝灰岩製の長持形石棺ないし長持形石棺の系譜をひく家形石棺の棺身(底石)とし、長浜平野を経済的基盤とし、垣籠古墳群(横山北部古墳群)を造営した政治的地域首長層(息長系氏族の国造層)をその被葬者にあてている。間壁忠彦氏・間壁葎子氏は長持形石棺の石材分析を通じて畿内および播磨の主要な長持形石棺が竜山石を使用していることを明らかにした論考⁽²⁾の中で石田所在の石棺石材にふれ、長持形石棺の可能性が高い竜山石の組合せ石棺材(底石)であるとしている。また、北村圭弘氏は石棺が付近の唐戸橋から移された組合式石棺の蓋石であることを明らかにした⁽³⁾。

この石棺が凝灰岩製の組合式石棺の一部であることはほぼ一致した意見であるが、これがどういった形式の石棺のどの部材か、また、いつごろに造られた石棺であるかは議論の余地があると考えられる。これらについて再検討することにより、この石棺のもつ意味について考えてみたい。

1. 石棺の形式について

この石材は現在、神社の本殿裏にある石田一族の供養塔前の広場に置かれている。これは(第2図-1)のように東端が欠損するものの、ほぼ長方形の平面形を呈する大型の板材である。現状で中央やや

東寄りのところで2つに割れていおり、現存長2.64mを計り、幅は西端部で1.25m、最大幅1.3m、東端の破損部で1.27mを測る。厚みは中央部で21cmを測る。また、長辺の両端に幅10cm、段差3~4cmほどの明確な段がみられる。上面は橋に使用された際に踏みつけられていたらしく、かなり磨耗している。下面の表面も多数の破損がみられ、本来の面を残す部分は少ない。また、石材は淡黄灰色を呈する硬質の溶結凝灰岩であり、竜山石とみられる。



第1図 位置図 (S=1/25,000)

この板石が石棺材であると考えた理由は、橋として使用する際に特に意味をなさない長辺の両端の段があり、当初から橋の部材として作られたのではなく、なんらかの構造物に使用されていた石材を転用して橋に利用したとみられること、石材が広く石棺に使用されている竜山石であることが挙げられる。また、状況証拠ではあるが、石材が使用されていた「唐戸（カラト）橋」の「カラト」とは、唐櫃（からと・からひつ）のこととみられ、その意味は国語辞典をひくと「足のある長方形の箱」、ないし「遺体を入れる棺」の意味がある。つまり、名前の由来は橋に転用される前の構造物が棺と認識されていたかどうかは別として、四角い箱状のものであったことを示していると考えられる。竜山石を使用した長方形の構造物と考えると、石棺である蓋然性が高いといえよう。

そこで、この部材が石棺のどの部分であるかを考えてみる。部材の最大の特徴は長辺側の両端に段をもつことであるが、部材が底石であるとする、この段は長側石を固定するための段差となる。しかし、横断面を観察すると、上面の中央部が約2～3cmほど緩やかに凹んでおり、段のすぐ横の部分が突帯状に彫り残されていることがわかる。また、下面も端部から幅20cmほどの部分が角を取るように丸みを帯びて緩く削られており、平坦でないことがわかる。そこで部材をひっくり返して考えてみると、裏面に浅い内削りをもつ扁平なカマボコ形の形態が浮かび上がり、北村氏のいうように蓋石と考えるのが最も妥当であろう。また、表面の破損が激しいとはいえ、この破片には表面・側面ともに縄掛突起の痕跡すら確認できないことから、もともと縄掛突起をもたない平坦な蓋石であったとみられる。

次に石棺の形式について考えてみると、平たい蓋石をもつ竜山石製の石棺には家形石棺、箱式石棺（シスト）、長持形石棺が思い浮かぶ。家形石棺とみた場合、竜山石を使用した石棺には、蓋石が明確な屋根形を呈する播磨型劔拔式石棺やほぼ同様の蓋石をもつ播磨型組合式石棺、蓋石が薄い板状を呈し、突起をもたない山畑型組合式石棺が候補に挙げられよう⁽⁴⁾。播磨型劔拔式石棺・播磨型組合式石棺でも、7世紀代のものには福西2号墳の石棺（第2図-

5）のように突起をもたず蓋頂部の平坦面指数が50を越える平坦な蓋石もみられる。しかし、それらでも一応屋根形を指向し、斜面と蓋頂部の境には明確な稜をもつものがほとんどである。このため、平たいカマボコ形を呈する今回の例とは形態が異なるといえよう。また、この石棺（全長2.6m以上）を上回る竜山石の家形石棺は、奈良県橿原市見瀬丸山古墳⁽⁷⁾（奥棺蓋：長さ2.64m、幅1.44m、前棺蓋：長さ2.89m、幅1.41m）ぐらいであり、他の石材の家形石棺をみても奈良県桜井市赤坂天王山古墳や滋賀県野洲郡野洲町円山古墳、奈良県平群郡平群町烏土塚古墳奥棺など少数に限られてくる。一方、山畑型組合式石棺は底石端部に段をもち、蓋石裏面には側板と組合う溝をもつ。さらに、播磨型組合式石棺の北嵯峨所在例（第2図-7）のように蓋石裏面に段や突帯をもつ場合もあるかもしれない。しかし、このタイプの石棺は葛城型のものと比べて小型のものが多く、東大阪市桜井1号墳の石棺（第2図-6）のように数石のパーツを組み合わせて蓋としている。また、そのパーツは横長ないし縦横の長さに差のない形態をしており、縦長の石材である今回の例とは明らかに異なる。これらのことから、今回の蓋石は定形的な家形石棺でないといえよう。

箱式石棺は近江でも花崗岩のものが点在している。しかし、箱式石棺は入手が容易な板状の石材を組合わせて作った石棺であり、通常は地元の石材を使用すること、その石材も未加工の自然石ないし節理を利用して板状に割っただけの板石を使用する例がほとんどである。問題の蓋石は直線距離にして150kmも離れた播磨地方から搬入されていることや明確な形の段や突帯を作り出した加工材を使用していることから、箱式石棺の可能性は低いといえよう。

最後に残った長持形石棺は古墳時代前期後半から中期にかけて、畿内の巨大古墳の主体部に採用された石棺である。これらは畿内の場合、初期のものを除いて竜山石で造られている。この石棺は、原則として蓋石1枚、底石1枚、長側石2枚、短側石2枚で構成されており、長側石が短側石を挟み込む構造をとることが特徴である。問題の扁平ないし、カマボコ形を呈し、内面に浅い内削りをもつ形態の蓋石は大阪府柏原市松岳山古墳⁽⁹⁾（第2図-4）や岡山県

邑久郡長船町花光寺山古墳⁽¹¹⁾（第2図-2）、岡山県津山市正仙塚古墳⁽¹²⁾（第2図-3）、大阪府藤井寺市津堂城山古墳⁽¹³⁾、奈良県御所市室宮山古墳⁽¹⁴⁾などの石棺にみられる特徴である。その中で、津堂城山古墳や室宮山古墳は蓋石の表面に格子状の彫り込みをもち、円柱状の縄掛突起が付く点で明らかに異なっている。松岳山古墳の蓋石は横断面を比較してみると、長側石と組合う部分が段となり、その内側に凸帯が設けられている点で非常によく似ている。

しかし、松岳山古墳の蓋石は花崗岩製であり、内削りが短側石との組合せ部分までで終わっている点や短側石との組合う溝が彫り込まれている点で異なっている。また、正仙塚古墳の場合、縄掛突起をもたない点や竜山石であることで類似するが、内削りが短側石の外側で終わっている点で異なっている。花光寺山古墳の蓋石は実見できないため、石材の種類や端部の段の有無は不明である。この蓋石は2石で構成されており、小型の蓋材は側面に縄掛突起をもっておらず、大型の蓋材と接する部分の内削りは端まで突き抜けている。石田の部材も2石で蓋を構成していたとすれば、側面に縄掛突起が付かないことも、残りの良い東端部に短側石との組合せ痕跡がなく、段や内削りが端まで突き抜けている理由も説明できよう。また、蓋の大きさを比較すると、松岳山古墳の蓋石が長さ4m、幅1.53m、花光寺山古墳の蓋石（2石）が長さ2.9m、幅0.9m、正仙塚古墳の蓋石が長さ2.4m、幅0.7mあり、現存長2.64m、幅1.3mの石田の蓋石が特別大きいということはない。

松岳山古墳の石棺は側石に割竹形石棺に使用されている讃岐の鷲の山石が使われていることから、室宮山古墳の石棺に代表される典型的な竜山石の長持形石棺⁽¹⁵⁾が作られ始める以前の石棺と考えられており、副葬品や埴輪からみて3期（前期末）の古墳といえる。正仙塚古墳の石棺は次の段階に石棺作りの技術が竜山へ伝えられて成立した石棺とみられ、定形化した長持形石棺の出現期に前後する3期～4期（前期末～中期初頭）と推測される。また、花光寺山古墳の石棺は石材の種類が不明であるが、松岳山古墳とともに長持形石棺に先行する形態の組合式石棺を有する妙見山古墳と同範の三神三獣々帯鏡をもつこ

とから、松岳山古墳と同様の時期とみられる。

こうしてみると、今回の蓋石にすべての点で合致する石棺をみつけることはできなかったが、各種の石棺のなかで3～4期の初現的な長持形石棺の蓋石がもっとも近似しており、定形化した長持形石棺に先行する形態の石棺であったと考えるのが妥当であろう。

2. 石田の石棺が出土した古墳

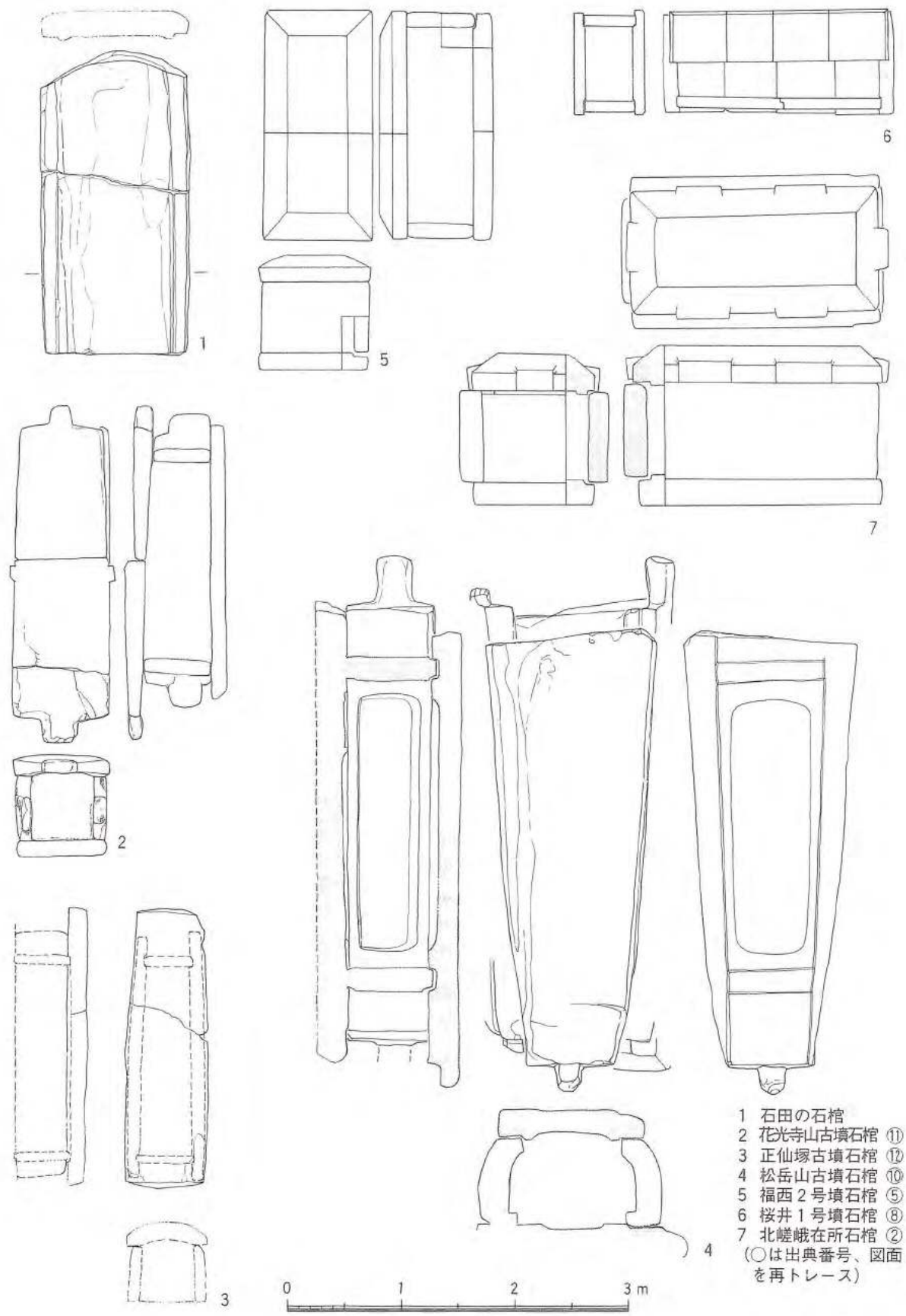
次に、長持形石棺をもつ古墳を検討することにより、石田の石棺が出土した古墳がどのような古墳であったかをみていきたい。

石田の石棺とはほぼ同時期の長持形石棺をもつ古墳には先程から述べている松岳山古墳、正仙塚古墳、花光寺山古墳がある。

松岳山古墳は後円部径72m、前方部幅32mを測り、全長130mの前方後円墳である。墳丘からは葺石と川西編年Ⅱ期の円筒埴輪や鱗付埴輪、布留式の土師器壺が検出されている。後円部中央の主体部には安山岩の板石を積んだ堅穴式石室に長持形石棺を収めている。副葬品には硬玉製勾玉やガラス小玉などの玉製品、碧玉製の石釧や鋏形石、鏡片、銅鏃、鉄剣などがある。この古墳は前期において河内最大の前方後円墳である。

正仙塚古墳は全長56m、後円部径34m、前方部幅16mの前方後円墳である。墳丘には葺石がみられるものの埴輪は確認されていない。主体部は石棺直葬とみられる。副葬品として半円方形帯神獸鏡や変形四獸鏡、勾玉、鉄斧などが知られている。美作では植月寺山古墳（全長92m）や美和山1号墳（全長80m）といった最大級の古墳が1期（前期初頭）の段階に築かれており、松岳山古墳のように前期最大の古墳とはいえないものの、この古墳が造られた3・4期では最大の古墳である。

花光寺山古墳は全長100m、後円部径54m、前方部幅28mを測る前方後円墳である。後円部には円筒埴輪列が3重にめぐっており、墳丘には葺石がみられる。主体部は後円部のほぼ中央に長持形石棺が直葬されており、石棺の前後には小型の石室が布設されている。副葬品には内行花文鏡、三角縁三神三獣帯鏡、太刀、短剣、槍先、銅鏃などがある。この



- 1 石田の石棺
 - 2 花光寺山古墳石棺 ⑪
 - 3 正仙塚古墳石棺 ⑫
 - 4 松岳山古墳石棺 ⑩
 - 5 福西2号墳石棺 ⑤
 - 6 桜井1号墳石棺 ⑧
 - 7 北嵯峨在所石棺 ②
- (○は出典番号、図面を再トレース)

第2図 石棺実測図

古墳は吉井川流域においては浦間茶臼山古墳（1期・全長138m）に次ぐ規模をもち、備前の中を見回しても同時期では湊茶臼山古墳（3期・全長150m）の次にくる古墳である。

また、長持形石棺らしき石棺が出土した伝承をもつ同時期の古墳では、明石市五色塚古墳（全長194m）が播磨最大の前方後円墳であるし、奈良市五社神古墳（全長275m）が見瀬丸山古墳⁽¹⁷⁾や箸墓古墳に次ぐ大和第3位の古墳である。

つまり、いずれの例も地域における最大級の前方後円墳であり、全長50mを下回ることはない。ただ、類例が少ないため、偶然に大規模な古墳であった可能性も考えられる。そこで、竜山石の長持形石棺をもつ中期の古墳の例をみると、該当する古墳は玉丘古墳、檀場山古墳、山之越古墳、櫛之堂古墳、室宮山古墳、屋敷山古墳、久津川車塚古墳、前塚古墳、朱千駄古墳の9例が挙げられる。その中で前方後円墳以外の墳形は竜山石の産地に近接する山之越古墳と櫛之堂古墳のみであり、櫛之堂古墳は檀場山古墳の周濠に接するように存在し、檀場山古墳の陪塚とみられる。また、全長100mを割る規模の古墳は山之越古墳（方墳・1辺55m）、櫛之堂古墳（1辺約20m）、前塚古墳（帆立貝式古墳・全長94m）、朱千駄古墳（全長65m）の4例だけである。つまり、中期においても竜山石の長持形石棺をもつ古墳は陪塚など限られた場合を除いて前方後円墳であり、墳丘規模も大半が100mを越えている。

これらのことから石田の石棺を出土した古墳を類推すると古墳時代前期末から中期初頭にかけて造られた地域首長墓であり、概ね全長100m級、最低でも全長50m以上の規模をもつ前方後円墳といえよう。

しかし、ここから特定の前方後円墳を捜し出すことは現在のところきわめて難しいと言わざるを得ない。つまり、湖北地域にある全長50m以上の前方後円墳は長浜市の長浜茶臼山古墳⁽¹⁸⁾（全長92m）と丸岡塚古墳⁽¹⁹⁾（全長130m?）、越前塚古墳（前方後円墳?・全長約50m）、近江町の後別当古墳（帆立貝式・後円部径50m）、浅井町の乗倉古墳（全長52m）と岡の越古墳（帆立貝式?・直径63m）、高月町の姫塚古墳（全長80m以上）と父塚古墳（全長80m）、古保利75号墳（全長53m）と西野山古墳（全長70m）の



第3図 横山北部古墳群

10基が知られている。しかし、その中で発掘調査により確実に時期が押さえられる古墳は周濠からTK208~TK10の須恵器が出土した越前塚古墳1基だけであり、それ以外の古墳も多くが埴輪を持っておらず、墳丘の形状から時期を類推するほかないという現状では明確な時期を判断し得ないからである。さらに、石棺を出土した古墳が現存するという保証もまったくない。つまり、石棺が掘り出されている状況から判断して、古墳は大きく破壊されているとみてよく、それを裏付けるかのように、石田の石棺に程近い横山北部古墳群では西山古墳や神塚古墳⁽²⁰⁾などの埋没古墳が水田の下から新たに確認されている。この付近で完全に削平された大型の前方後円墳が検出される可能性は高い。

結局、石棺が出土した古墳まで言及することはできなかった。しかし、4世紀末という巨大古墳の造営が大和から河内・和泉へ重点を移す直前の段階、つまり、畿内中枢において非常に大きな政治的な動きがあったと推測される時期に、石田の長持形石棺が作られたことが明らかとなった。この近江で唯一

確認された長持形石棺が、その分布の中心である畿内により近い湖南・湖東地域ではなく、東海地方や北陸地方への交通の要所を押さえる湖北の地にもたらされたという事実は近江の古代史を考えていく上で重要な鍵の一つになるといえよう。

註

- (1) 丸山竜平「近江石部の基礎的研究」(『立命館文学』312号 立命館大学人文学会 1971年)
- (2) 間壁忠彦・間壁茂子「石棺研究ノート3 長持形石棺」(『倉敷考古館研究集報』第11号 倉敷考古館 1975年)
- (3) 北村圭弘「長浜市石田町の唐戸橋について」(『滋賀県文化財だより』第192号 滋賀県文化財保護協会 1994年)
- (4) 和田晴吾「畿内の家形石棺」(『史林』第59巻3号 史学研究会 1976年)
- (5) 安藤信策「山城の石棺」(『京都考古』第15号 京都考古刊行会 1975年)
- (6) 二上山白石製の石棺では二子塚古墳北墳の例のように蓋頂部に稜線をもたないカマボコ形の蓋石も存在するが、今回の例に比べてかなり背が高いなど形態は大きく異なっている。
- (7) 陵墓調査室「畝傍御墓参考地石室内現況調査報告」(『書陵部紀要』第45号 宮内庁書陵部 1994年)
- (8) 原田修「桜井1号墳発掘調査」(『東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概要』27 東大阪市教育委員会 1986年)
この石棺は二上山の白石凝灰岩と竜山石が使われており、蓋石石材は白石である。
- (9) 西谷真治「長持形石棺」(『小林行雄博士古稀記念論文集考古学論考』1982年)
- (10) 小林行雄「河内松岳山古墳の調査」(『大阪府文化財調査報告書』5 大阪府教育委員会 1957年)
- (11) 梅原末治「備前行幸村花光寺山古墳」(『日本古文化研究所報告』4 日本古文化研究所 1937年)、西川宏『岡山県史』考古編 1986年)
- (12) 湊哲夫「高野山西正仙塚古墳」(『津山市文化財年報』1 津山市教育委員会 1975年)、『津山の文化財』(津山市教育委員会 1976年)
- (13) 梅原末治『久津川古墳研究』1920年)
- (14) 秋山日出雄・網干善教『室大墓』(『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』18 奈良県教育委員会 1959年)
- (15) 田中英夫「長持形石棺の再検討」(『古代学研究』第77号 1975年)

石田の蓋石は同氏の分類の蓋石Ⅰ～Ⅲの形態に該当する。

- (16) 註(2)に同じ。
- (17) 註(15)に同じ。
- (18) 梅原末治「播磨国壇場山古墳の調査」(『人類学雑誌』39巻2号 1924年)
- (19) 長浜茶臼山古墳は戦前に後円部がかなり削平されたという話からこの古墳を前期末頃とみる考えもある。湖北最大の前方後円墳という点や後円部でのレーダー探査により10m近い長大な粘土礫もしくは堅穴石室の存在が確認されたという点から石棺の出土古墳の有力な候補といえよう。しかし、主体部が残っているとすれば後円部が大幅に削平されたとは考えにくく、現状の墳丘が本来の高さからさほど変化していない可能性が高い。このことから古墳は中期に属すると考えられ、石棺の年代と合わなくなる。
- (20) 丸岡塚古墳は前方部推定地から古墳時代中期の堅穴住居が検出されていることから、中期以降の古墳であるか、推定されている規模よりかなり小さい古墳とみられる。
- (21) 「上寺地遺跡」(『レトロ・レトロの展覧会』1997 滋賀県文化財保護協会 1997年)

参考文献

- ・間壁忠彦・間壁茂子「石棺研究ノート4 石材からみた畿内と近江の家形石棺」(『倉敷考古館研究集報』第12号 倉敷考古館 1976年)
- ・和田晴吾「大王の棺」(『仁徳陵古墳 築造の時代』大阪府立近つ飛鳥博物館 1996年)
- ・菅谷文則『新庄屋敷山古墳』新庄町 1975年
- ・宮成良佐・森口訓男『長浜市史』1 1996年
- ・近藤義郎『前方後円墳集成』近畿編 1992年
『前方後円墳集成』中国・四国編 1991年

編集後記

『紀要』第11号を発行することができました。紀要の創刊は、昭和63年3月なので本号でちょうど10年を迎えることとなります。初心を忘れることなく続けていきたいと思っております。

前号より、本文は2段組となり量的に若干の余裕ができ、本号には各時代にわたって12本の論考を掲載することができました。つきましては、多くの方々からご叱正とご指導を賜れば幸いです。 (K. O)

平成10年3月

紀要第11号

編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会
大津市瀬田南大萱町1732-2
Tel(077)548-9780・9781

印刷・製本 富士出版印刷株式会社
大津市札の辻4-20
Tel(077)523-2580 Fax(077)524-6668

8923

K

滋賀県文化財
保護協会蔵書印

440